

# 公益事業レポート2009

## 遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞 授賞



「すべての人びとの いのちと環境のために」



社会との対話  
作家 山崎光夫さん×山田洋輔  
"遠山椿吉の創業精神"

# すべての人びとのいのちと環境のために



けですが、戦後に再建された当財団がこれまで実践してきた保健衛生の事業は、すべての人びとに分け隔てなく、健康ないのちと、これを保てる生活環境を作り上げる、ということを究極の目標としてきました。

2009(平成21)年は、「遠山椿吉賞」の第1回健康予防医療賞授賞式を開催させていただく運びとなりました。一昨年、創業者生誕150年没後80年を記念して創設した本賞は、現在第2回食と環境の科学賞の募集を行っており、学会誌や専門誌等で、徐々にその存在が知られるようになりつつあります。

当財団および医療法人の基本理念は、「すべての人びとのいのちと環境のために尽くす」ということです。

東京顕微鏡院は、明治の細菌学者、遠山椿吉博士が119年前に創業し、36年かけてその基盤を築き、財團として後世に託したわ

振り返りますと、2009(平成21)年の年頭は、100年に1度の難局という危機意識をもつべきだと、職員の皆さんに呼びかけたことが思い起こされます。難局とは、私にとって原点に立ち返る変換期だと思うわけで、ここを乗り切る3つの心構えを申し上げました。

徹底的に原理原点に立ち返ること、悲観しないこと、両法人全組織は一体、一つの体であるという気持ちで行動していただきたいということでした。

その結果、おかげさまで両法人の業績も非常に順調に推移しており、厳しい経済情勢のなかにもかかわらず、本年度の業績は、過去の水準と比較して最高の売上、利益を達成することができました。このように、いま、両法人が着実に拡大していく兆候が現れているわけですが、私が申し上げたいのは、売上、収益を上げていく、そのことがこの事業の最終的な目的ではない、ということです。

社会の福祉、もっと端的に言えば、人々の幸せのために、わかりやすく言うと皆さんのがハッピーになるために、われわれの事業がある。収益というのは社会に貢献するための手段です。

原点に立ち返る変換期と申しましたが、原点のさらに原点とは何だと思いますか？

これはまさに、われわれのこころとからだなのです。こころとからだの健全性を保つということは、まさに原点の中の原点です。これからの5年、10年を見た場合、正に社会が求めている事業の真っ只中にわれわれはいる、というふうに思います。3年、5年、10年というスパンでものを見ながら行動していくば、この両法人は非常に大きく展開して、社会の役に立つ活動ができると信じております。

さて、来年は創業120周年を迎える節目の年です。

今からおよそ70年前、創業50周年記念式典を祝った昭和15年当時の記念絵葉書が今に残っています。絵葉書の「財団法人東京顕微鏡院の使命」と題する組織図には、細菌学や放射線科学の研究、講習会、学会、雑誌発行、医学図書館運営を担う「医学研究及び輓推（学術振興）部門」や、水や血液等の「医事衛生検査」部門、顕微鏡等の「医科用器械・検定」部門、自家ワクチンや各種標本の「製品」部門、無料健診などの「社会事業」部門、健診や予防

注射など保健予防、内科、放射線科を含む「診療」部門など、いのちと環境衛生に関わるさまざまな事業内容を一覧することができます。

研究と学術振興、衛生思想の普及啓発、社会貢献といったいわゆる公益事業と、医事衛生分野で収益を得る各種の事業を一体として運営し、われわれの社会的「使命」と題しているわけです。

公益事業、そして社会的公益性の極めて高い事業そのものを、今後とも一体としてすすめ、両法人が予防医療、食品の安全、生活環境衛生を通して、さらに大きく社会に貢献できる立派な法人に発展することを祈念いたします。

平成22年5月

財団法人東京顕微鏡院 理事長

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 理事長

山 田 匠 通

# 学術振興 (遠山椿吉賞)

## すべての人びとのいのちと環境のために

2008(平成20)年度、当財団創業者、医学博士遠山椿吉の生誕150年、没後80年を記念して創設した、公衆衛生と予防医療の分野における研究者を対象とした顕彰制度です。「遠山椿吉記念食と環境の科学賞」と「遠山椿吉記念健康予防医療賞」を設け、隔年で選考顕彰します。授賞式では、賞状、記念品、副賞100万円を授与し、記念講演およびレセプションを開催しています。



TINKITI TOYAMA MEMORIAL  
PREVENTIVE MEDICINE IN HEALTHCARE AWARD

## 遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞

平成21年度は、将来の予防医療のテーマに先見的に着手したものを重点課題としました。「近い将来の健康診査の方法論を変えるようなもの」「性差医療に関するもの」「超高齢社会構造における予防医療に関するもの」「健康診査の受診の機会を高め、医療経済面での効果が見られ、健康診査の精度向上に資するもの」「こころの健康づくりおよび、これに関する科学者によるスピリチュアル分野における研究」などを想定し、幅広い分野からの応募を呼びかけました。

本賞は、病を早期に発見し、治療へつなげるという予防医療の基本目標について、地道に社会への貢献を追求する研究者を顕彰する賞と位置づけています。

### 遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞



鈴木 隆雄 (すずき たかお)

国立長寿医療センター研究所 所長

「高齢者の生活機能の維持・向上と介護予防を目的とした包括的健診の開発と普及についての調査研究  
—超高齢社会における新たな健康維持と予防医療へ向けての科学的取組み—」

注:上記は、東京都老人総合研究所(現 地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター)在職時における研究成果である。

### 遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞 特別賞



中村 雅一 (なかむら まさかず)

大阪府立健康科学センター  
脂質基準分析室 室長

「国際標準化を通じた国内臨床検査室の脂質測定精度の向上とその臨床研究・疫学研究・公衆衛生施策への応用」

## 選考の過程

2009(平成21)年1月から学会・関連媒体等を通して広報を行い、6月末日までに9件のご応募をいただきました。一つひとつが非常に優れた研究内容であり、研究分野も多岐にわたるものでした。6名の選考委員が個別に事前審査した上で、9月25日選考委員会を開催し、本賞の趣旨と今年度の重点課題についてコンセンサスを確認し、一定の選考フィロソフィーに従って選考を進め、充分に吟味した上で受賞候補者を選びました。

この選考委員会の結論を踏まえ、10月23日、当財団・医療法人合同の経営会議で、鈴木隆雄氏の受賞が決定しました。

また、今回、特別に選考委員会の推薦を受けて、中村雅一氏を特別賞受賞者に決定しました。





創立者 遠山椿吉(とおやま ちんきち)

1857(安政4)年山形県生まれ。東京大学医学部において別課医学を修めた後、山形県医学校長心得などを歴任。1888(明治21)年東京医科大学撰科に入學し、衛生学および微生物学を研究。1890(明治23)年1月、帝国医科大学国家医学科に入學、同年4月卒業証書を授与される。1891(明治24)年、東京顯微鏡院の前身である東京顯微鏡検査所を創立。かたわら東京慈恵医院医学校(東京慈恵会医科大学の前身)講師、東京市衛生試験所長などの職を兼ねる。特筆すべき業績は、東京顯微鏡学会の創立、ペスト菌の研究、脚気の治療方法の研究、東京の水質管理を担い、水道の衛生管理に尽力、また保健部を新設し、予防医療を展開するなど多岐にわたる。機関紙『顯微鏡』『東京顯微鏡学会雑誌』を主宰し、医事衛生に関する数多くの著書や短歌を残し、華道、庭園学などについても著述している。亡くなる1年前にそれまでの人生を振り返り、思想哲学をまとめ「人生の意義と道徳の淵源」を上梓した。1927(昭和2)年、東京顯微鏡院を財團法人とし、初代院長に就任。1928(昭和3)年10月1日逝世。享年71歳

## 2月9日 遠山椿吉賞授賞式

「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」の授賞式・記念講演会・レセプションは、2010(平成22)年2月9日(火)に東京・飯田橋のホテルメトロポリタンエドモントにて開催されました。授賞式には、選考委員の先生方を始め、遠方からも研究者、大学教授、会社関係者、報道関係者ほか当法人関係者など、およそ150名が祝福に集まりました。

山田匡通理事長は、「われわれの活動は、いかに人びとのいのち、健康を維持するか、どうやって病気にならない環境を作るかを基本的テーマとしています」と述べ、「このたびのお二人の研究成果は、正にその目的にかない、公衆衛生・健康の増進に対する大きな貢献だと考えます。お二人の先生方のますますのご活躍、ご健勝をこころより祈念いたしまして、祝辞とさせていただきます」と結びました。

平成22年度は、生活環境衛生と食品の安全を重点課題とし、「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞」を選考顕彰いたします。

### 受賞者あいさつ

**鈴木 隆雄 氏** 「20年前から老化に関する長期縦断研究に携わるなかで、「要介護」の状態になっていく高齢者の危険因子が、徐々にわかってきたわけです。また、2000(平成12)年当時介護保険が開始されたこともあり、その危険因子を取り除いて高齢者の自立を図ることは非常に重要だと思いました。そこで、高齢者には病気予防よりも、むしろ生活機能を維持し、要介護状態にならないことを目的とした健診、「お達者健診」をモデル的に開始したわけです。

東京都老人総合研究所(以下、老人研。現・東京都健康長寿医療センター)で、多くの研究者と少しずつ、高齢期になっても日々の生活を自立し、自分らしい人生を送るために科学的なエビデンスを積み上げてきたことが、この受賞に結びついたと思います。今まで一緒に研究を行ってきた多くの方々と共同での受賞と考えております。

2009年4月着任した国立長寿医療センターの仲間達と、老人研の仲間達と共に、できるだけ健全な高齢社会を築けるよう、今後とも少しずつ努力を続けたいと思っております。」

\* \* \* \*

**中村 雅一 氏** 「私どもが進めてきた「標準化」とは、検査機関が正確な測定結果を患者さんにお返しして、医師による診断治療のお手伝いをするという品質管理システム(精度管理)のことです。米国の疾病対策予防センター(CDC)が、WHOの協力センターとして世界に展開する2種類の脂質標準化プログラムに参加して34年間が経過しました。(中略) 標準化は、皆様方の目に直接触れる事のない舞台裏の、地道で根気のいる仕事であります。この影の仕事に今回光をあてられ、栄えある賞をいただくことになりました。仮に標準化にゴールがあるとすれば、それは地上から脳卒中や心筋梗塞が制圧され、撲滅される日であると考えております。その日が到来するまで、標準化は続きます。このたびの受賞は、脳・心血管系疾患の予防対策が更に前進するための激励の一里塚です。さらに、後に続く人たちにも希望と勇気と光を与えるに違いありません。これを機会に、今後も一層精進したいと考えております。」

\*遠山椿吉賞について詳細は、当財団ホームページをご覧ください。

●撮影協力:栗山 実、吉明地 彰



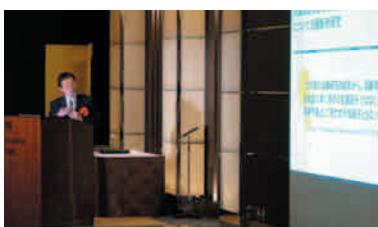
山田匡通理事長より鈴木隆雄氏に遠山椿吉賞を授与



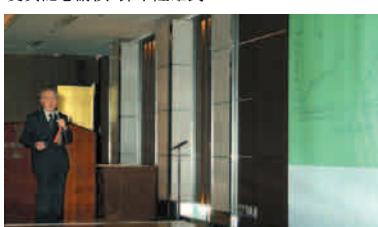
中村雅一氏に特別賞を授与



授賞式会場全景



受賞記念講演:鈴木隆雄氏



受賞記念講演:中村雅一氏



「遠山先生は、研究室で得られた成果を公衆衛生の現場で生かすようにと、教えておられます」と、大阪府立健康科学センターの中村雅一氏。

## ◆選考委員長講評



折茂 肇

健康科学大学 学長

鈴木隆雄先生のご研究は、今後の超高齢社会における高齢者の健康新維持・向上をめざした新しい予防医療のあり方を提示したもので、具体的には、70歳以上の高齢者の介護予防をテーマとして、地域で行った健診の追跡調査のデータを元に、高齢者を対象とした新しい包括的健診のあり方や、介護予防の方策を提示しています。

このたびのご業績は東京都老人総合研究所(以下、老人研)が東京都小金井市、秋田県南外村等の一般住民を対象として1991(平成3)年に開始した Longitudinal Interdisciplinary Study on Aging (LISA Study)の調査成績および2001(平成13)年から板橋区内で実施してきた高齢者の「お達者健診」の成績が主なベースとなっています。

鈴木先生は、当時この研究プロジェクトの中心的な研究者としての役割を果たしておられました。本日の受賞は、この研究グループの業績に対するもので、鈴木先生が研究グループの代表として受け取られるものです。

## ◆来賓祝辞



井藤 英喜

(独) 東京都健康長寿医療センター  
センター長

鈴木隆雄先生は、1990(平成2)年に東京都老人総合研究所にご赴任されて以来、「小金井研究」「お達者健診」から「介護予防」の仕事まで、20年にわたり老年学、高齢者の研究に従事されてきました。先生の用いられた研究手法は疫学、介入研究ということですが、この種の研究には研究チームをつくり、それをリードする立場の人のご努力とともに、チームの協力がないと、なかなか大きな成果を生まない分野です。その意味で今回の受賞は、鈴木先生とともにチームの方々も同時に受賞された賞だと思います。

鈴木先生のお仕事の素晴らしいところは、まず、ハイリスクの人を見つけて科学的な診断法「お達者健診」を作って、その有効性を検証し、同時にそこでピックアップされたハイリスクの方たちに対して、どういう運動、どういう食事のプログラムを提供すれば、より良い介護予防につながるかといったことについて、非常に科学的に研究を進められた点にあります。

これまで、介護予防は、福祉の分野が担っていた仕事です。そこでは、

さて、このたびの遠山椿吉賞は、特に特別賞を設けて、中村雅一先生にお贈りすることとなりました。中村雅一先生の長年にわたるご研究は、心筋梗塞や脳卒中などの動脈硬化性疾患の危険因子とされる、血中脂質の基準値の国際的な標準化に関するものです。精度管理や標準化という仕事の性格上、非常に地味ですが、極めて重要な研究であります。動脈硬化治療薬のEvidence-Based Medicine (EBM)の構築において、縁の下の力持ちとして重要な役割を果たしてこられました。遠山椿吉博士の生き方にも一脈通ずるところがあり、公衆衛生の向上に地道に貢献されてこられたことに深い敬意を表し、このたび特別賞として表彰することとなりました。

高齢者の介護予防の新たな包括的健診法を開発された鈴木隆雄先生、また特別賞として血中脂質に関する国際的な標準化の研究を行ってこられた中村雅一先生の受賞を心からお慶び申し上げます。

選考委員長として選考の経過を振り返ってみると、この遠山椿吉賞の存在と意義を強く感ずる次第です。公衆衛生学や予防医療は、研究者個人の先見的な発想や、社会的使命に基づく地道な研究を必要としますが、先端医療の分野とは異なり、非常に地味な分野で、研究者個人に光が当たることの少ない分野です。この遠山椿吉賞がこれまで行われた多くの優れた研究者の業績に光をあて、その偉業を公に称えることで、これをきっかけに次世代を担う後進の育成につながれば幸いであると考えております。

気持ちはあっても科学はなかった、という時代が、非常に長く続いておりました。その意味では、鈴木先生たちが始めた仕事が、福祉の分野にエビデンスが必要である、科学的な思考が必要であるということを、初めてわが国に持ち込んだのではないか、と思っております。

中村雅一先生は、35年の長きにわたって、血中脂質の標準化という分野をリードされてきました。私どもも、日本で初めて大規模臨床研究を始めた際、先生のご指導で脂質測定の標準化を実施していただきました。結果、高齢者のコレステロールを低下させることができ、動脈硬化の予防につながることを10年かけて導き出したわけですが、その影には、信頼できる検査を多施設で実施できたことが、非常に大きな役割を担っています。また、日本は、動脈硬化のあり方も欧米とはかなり違いますが、国際比較には、日本の検査が国際的な基準に達していることが必要です。

そうしたなか、中村先生は、35年の長きにわたって、わが国の血中脂質の測定が国際基準に達するように種々のご努力を傾けられました。中村先生のお仕事は、日本発の脂質測定データの信頼性を確立したともいえます。

最近では、LDLコレステロール(悪玉コレステロール)を直接測る検査キットが日本から出ていますが、実は、その開発に非常に大きな役割を果たされたのが中村先生です。

先生には、ますます今後とも、検査医学の分野で、ご指導を願えればと思っております。

遠山椿吉賞受賞のニュースは、都政新報「ひと」欄、日経メディカル誌「ヒーローの肖像」欄で紹介されました。



都政新報  
(2010年3月5日)



日経メディカル誌 (2010年3月号)、日経メディカル オンライン (2010年3月15日) (転載)

# 学術振興

## 学会・研究会への助成活動、医師や職員による研究発表

東京顕微鏡院は、1989(平成元)年4月以降21年間にわたり「日本食品微生物学会」に事務局機能の提供を行うなど、保健衛生分野における学術振興に努めています。また、医事衛生の研究及び振興に資するため、医師や職員による調査研究活動に力を入れています。

### ◇ 学会・研究会への助成活動

#### ①「日本食品微生物学会」への助成・学会活動

本年度30周年を迎えた「日本食品微生物学会」は、食品の微生物に関する学術研究の推進と、食品の安全及び機能向上への寄与を目的としたユニークな学会です。



「30周年記念学術総会」(平成21年10月19～21日於タワーホール船堀)では、当財団伊藤武理事により、記念講演「微生物検査法



の変遷と展望」、ランチョンセミナー「食品関係従事者の腸管系病原微生物検査の意義と検査法」が行われました。また、「カット野菜、カット果実およびスプラウトの微生物汚染に関する検討」(研究者:当財団 森哲也、和田真太郎)が、ポスター発表されました。

#### ②「CHRO2009」への助成

カンピロバクター属とヘリコバクター属の病原細菌とその関連疾患に関する国際学会“15th International Workshop on Campylobacter, Helicobacter, and Related Organisms (CHRO2009)”(平成21年9月2～5日於新潟コンベンションセンター)が開かれ、当財団伊藤武理事がエグゼクティブ・コミッティーメンバーを務めました。日本での開催は、1981(昭和56)年同学会が英国で開催されて以来アジアでは初めてのことです。



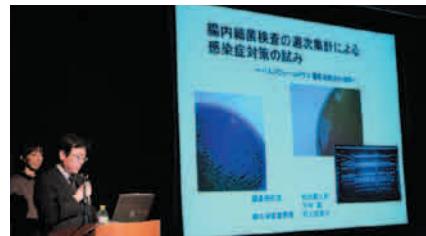
### ◇ 医師や職員による研究発表

#### ①「性・年齢を考慮した基準値と従来の基準値による人間ドックデータ判定結果の比較検討」

代表者:木村慶子 医社こころとからだの元氣プラザ理事

共同研究者:小田瑞恵、高築勝義、細井義男、島田直樹\*、松葉尚子 \*昭和大学医学部公衆衛生学講座

2006(平成18)から続けた「性差・年齢推移を考慮した検査データの基準値研究」の一環。日本人間ドック学会(平成21年9月4日(金)於グランドプリンスホテル赤坂)ポスターセッションにて発表。

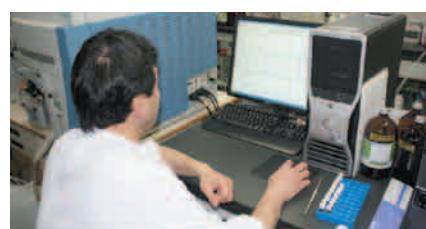


資するため、衛生指標菌や病原菌検査について遺伝子レベルの疫学解析で有用性を研究。研究成果は、当法人創立記念の日 研究・業務改善発表会(平成22年2月13日(土)於サイエンスホール)にて特別賞受賞。

#### ③「動物飼料中のエストラジオール分析法の検討」

代表者:朝倉敬行 当財団食と環境の科学センター 食品理化学検査部

共同研究者:北村真理子、山本信次、加藤文秋、安田和男



#### ②「パルスフィールドゲル電気泳動による衛生指標菌の疫学的解析」

代表者:和田真太郎、平井誠 当財団調査研究室

共同研究者:村上由美子

食品メーカー等の衛生管理システム向上に

実験動物用飼料の中の天然の女性ホルモン、エストラジオールは、高感度な分析法が必要とされる。検査法確立のため研究を実施。当財団平成21年度事業年報にて報告予定。

#### ④「檜原村民に安全でおいしい水を提供するための基礎調査」

代表者:箭内慎吾 当財団食と環境の科学センター 営業第3G

共同研究者:岡部大達、山賀健治、川崎千珠子、渡邊政人、瀬戸博、清水隆浩、千代田守弘、川俣友、荒川恵子、渡辺勝男、馬場洋一、吉川百合、伊藤武



食品衛生管理手法であるHACCP(危害分析重要管理点方式)の考え方方に従い、水源から蛇口までの水の安全性をモニタリングし、檜原村民に安全でおいしい水を提供する。3年計画初年度のため、平成22年度以降調査結果を発表予定。

# 普及啓発 (健康セミナー)

## “こころ”と“からだ”的健康のために

本年度は、前年度に続き『健康日本21』に基づく健康セミナーシリーズを展開。「人生80年時代」に健やかな老後を過ごすため、働きざかりから始める健康づくりを重点課題としました。また、子宮がん検診の普及啓発を、結婚や出産を考える若い女性のための健康セミナーとして企画しました。

### ① 健康に関するセミナー

◎シリーズ「働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり」全3回  
(会場はすべて女性と仕事の未来館)

◆7月29日「働きざかりから始める歯周病対策 生活習慣病の黒幕—それは歯周病!」(参加者数:192名)

◎後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、日本歯周病学会、8020推進財団



わが国では、国民の70%以上が歯周病患者と言われています。近年、歯周病菌が全身の疾患に影響を及ぼすことがわかってきており、老年期に歯を失う原因の1つでもある歯周病を、新しい角度から取り上げました。

歯周病学が専門の東京医科歯科大学大学院教授 和泉雄一先生に、歯周病が生活習慣病など全身疾患、特に糖尿病に及ぼす影響の最新情報や口腔内の正しいケアの方法など、歯から考える健康づくりについて分かりやすくお話しいただきました。

◆10月16日「働く人のストレス対策～うつ病を防ぐセルフケア!」

(参加者数:300名)

◎後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、中央労働災害防止協会

現在、多くの労働者が職場で強いストレスを感じていると言われています。うつ病の罹患など深刻な状況になる前に自分のストレスの状況を把握して、適切にケアすることが重要です。

精神医学が専門の東海大学医学部教授 保坂 隆先生が、うつ病になりやすい性格の見極



め、ストレスによる心身の不調からうつ病になるまでの段階、ストレス緩和のためのセルフケアなど、ストレスと上手に付き合っていくための自己管理術を、事前に参加者からいただいた質問を織り交ぜてお話しいただきました。一般の方に加えて、企業の人事・労務担当の方も数多く来場しました。

◆12月1日「メタボ・うつと睡眠障害予防と対処法」(参加者数:320名)

◎後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、中央労働災害防止協会



睡眠に対する社会的な関心の高さから、昨年度に引き続き、睡眠に関するセミナーを開催。今年度は睡眠障害とメタボ・うつの関わりに焦点をあてた新たな切り口で企画しました。

睡眠障害の専門医で(財)神経研究所付属睡眠学センター センター長の井上雄一先生

より、睡眠障害によるこころの病や生活習慣病への影響とその対策、最近増加傾向にある睡眠時無呼吸症候群とそのケアの方法など、臨床の現場から数多くの事例を交えてお話しいただきました。

(全3回シリーズの講演内容を、講師の先生方のご理解・ご協力により、小冊子に編集しました⇒P10)

### ② 女性のための健康セミナー

◆11月11日「妊娠と出産へのキャリアパス!～出産の高齢化と子宮頸がん予防について」(参加者数:17名)  
(こころとからだの元気プラザ会議室)



女性の一生にとって、妊娠・出産は、大切なテーマ。社会進出する女性が増えて晩婚化が進み、結婚・出産年齢が20代から30代へシフトしている一方で、近年、20代・30代の女性がかかる“がん”が増えています。

そこで、婦人健診の受診率が低い実情を鑑み、こころとからだの元気プラザの婦人科医師で、東京医科大学兼任准教授の永田順子先生が、女性セミナーを企画。昨今の結婚・出産年齢の傾向、年齢と異常妊娠・死因の関係や女性特有のがんの実態、30代の妊娠に備える健康づくりと予防医療(子宮がん検診)など、結婚や出産をテーマに、子宮がんリスクへの備えや、健康な子供を産むための知識をお話しました。

(講演内容はHPでご覧いただけます:元気プラザ>Information>メルマガコラム>セミナーリバイバル)

# 普及啓発

(食と環境のセミナー)

## 身近な食や環境の問題について

近年、ぜん息やアトピー性皮膚炎など子どもたちのアレルギー疾患は増加傾向にあり、発症の低年齢化も進んでいると言われています。子どもたちを取り巻く環境と健康の両方の視点から、一般の方を対象に室内環境の改善方法や正しいアレルギー疾患の対処法を啓発するシンポジウムを開催しました。また、東京顕微鏡院は20年以上にわたって企業等の担当者対象セミナーを開催しており、最先端の食や環境の情報提供に努めています。

### ③市民公開シンポジウム

#### ◆12月19日「子どもを取り巻く環境と健康」～今、知っておきたい室内環境対策とアレルギーケア～

(女性と仕事の未来館 参加者数:112名)

◎後援:厚生労働省、文部科学省、東京都、日本学校保健会、日本学校薬剤師会、東京都学校薬剤師会、日本アレルギー学会、室内環境学会



オープニングトークとして、地球環境・室内環境をテーマに精力的に研究されてきた、東京大学大学院教授 柳沢幸雄先生よりシンポジウムの主旨と狙いをお話しいただきました。基調講演では、室内環境と健康の関わりがご専門の東海大学教授松木秀明先生より汚染の実態と具体的な改善方法を、また子どものアレルギー治療に豊富な経験を持つ臨床医の立場から、国立成育医療センターの赤澤晃先生よりアレルギー疾患の実態と正しい対処法をご紹介いたしました。

パネルディスカッションでは、子どもを持つ母親の立場から(独)国立環境研究所環境リスク研究センター特別研究員の河原純子さん、報道の立場から毎日新聞記者の田村佳子さん、



室内環境の検査機関の立場から当財団瀬戸博 環境衛生検査部長をスピーカーに加え、参加者から寄せられた質問も取り上げながら、将来に向かって私たちが取り組むべき「子どもを取り巻く環境と健康」の課題を討議しました。

### ④食と環境のセミナー

当財団は、20年以上にわたり、企業の担当者などを対象に、実務に役立つ、時代の最先端の情報を提供しています。講師等詳細は、当財団ホームページをご覧ください。

#### ◆第72回 食と環境のセミナー(5月27日) 「食品安全のための理化学的規格基準及び試験法の設定／学校給食の衛生管理に関する新たな取り組み」

(日本橋社会教育会館 参加者数:160名)

#### ◆第73回 食と環境のセミナー(7月31日) 「新型インフルエンザ(H1N1)流行への対応(第一回)／食品リサイクルの現状と課題」

(日本橋社会教育会館 参加者数:142名)

#### ◆第74回 食と環境のセミナー(11月13日) 「東京都における食肉の生食による食中毒防止対策／消費者庁における食品表示の取り組み」

(日本橋社会教育会館 参加者数:163名)

#### ◆第75回 食と環境のセミナー(2月24日) 「フードチェーンにおける食品安全確保のためのISO22000と今後の動向について」「中国における食料産業の構造変化と食品の安全対策」

(日本橋社会教育会館 参加者数:124名)



### ☆参加者の声を反映した セミナーブルと高い満足度を、 これからもめざしてまいります。

セミナーでは事前に参加希望者からアンケートを取り、聴衆の構成や講演に関する疑問や関心点を講師にお伝えし、講演内容に反映させています。

セミナー開催後のアンケートでは、すべての講演で多くの来場者から満足な内容であった旨の回答をいただきました。

(来場者の声:一部抜粋)

\* \* \* \* \*

#### ○「働きざかりから始める歯周病対策 生活習慣病の黒幕—それは歯周病!」

・私は歯科医師ですが、一般の方にも分かりやすく説明されていて、飽きさせないお話を大変良かったです。質疑応答も効率よく行われたと思います。配布資料もとても分かりやすくまとまっておりましたし、復習もしやすいです。

(女性 20代 歯科医師)

#### ○「働く人のストレス対策～うつ病を防ぐセルフケア！」

・セルフケアのヒントをいただけた内容かと想像していましたが、「うつ」とは何か、ということから、実際の対応の方法、治療の方法、職場での対応、健診での指導、一般的な誤解の問題…全て知りたかった内容でしたし、それら全てのお話を通じてセルフケアを学べる、という流れに大変感銘いたしました。(女性 30代 会社員)

#### ○「メタボ・うつと睡眠障害 預防と対処法」

・睡眠障害によって、生活に支障が出るだけでなく、病気になりやすい事が分かった。睡眠がどれだけ人間にとって大切なものが良く分かりました。

(男性 20代 学生)

・メタボ・うつ・不眠の関連性、メカニズムが良く分かり勉強になった。なぜ不眠の治療が重要か、メタボ予防が必要か改めて復習でき、現場で活用していくと思う。(女性 20代 保健師)

#### ○「妊娠と出産へのキャリアパス!～出産の高齢化と子宮頸がん予防について」

・予防(健診)や出産と年齢について現状がわかり、大変ためになった。毎年検診を受けようと思う。

(女性 30代 会社員)

・検診に抵抗があり、病院にいかなかったが、大切なことだと思った。参加してよかったです。これからも女性専門のセミナーを計画してほしい。

(女性 30代)

#### ○「子どもを取り巻く環境と健康」～今、知っておきたい室内環境対策とアレルギーケア～

・貴重なデータで参考になりました。園の布団やカーペットも清掃や管理に気をつけたい。

(50代 女性 保育園看護師)

・きちんとした治療を根気よく続ける事が、アレルギーやぜん息には大切であることがわかりました。

(30代 男性 会社員)

・忘れがちな換気の重要性の実例をもとに説明していただき、分りやすかったです。

(20代 男性 会社員)

# 出版関連

## 幅広く健康・生活情報を提供

人気の健康セミナーシリーズ「働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり」は、昨年度に引き続き講演録を小冊子に制作し、さらなる予防医療の普及・啓発に努めています。また、食品の安全や環境衛生分野では、関係業者等の自主衛生管理にお役立てていただくため、『食品と環境』衛生講座シリーズを小冊子として企画し、第1弾を発刊しました。

### ①働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり・4~6

人生80年時代をキーワードに開催したセミナー内容を、手に取りやすい小冊子で紹介する人気シリーズ。本年度は、これまで知られていなかった歯周病と生活習慣病の関連性や、睡眠改善ができるメタボ対策、多角的なうつメカニズムの解説と対策など、からだの不調を予防するために、自分でできる健康づくりを紹介します。



発行日など:④平成21年12月/A5版40ページ/1,500部  
⑤平成22年3月/A5版32ページ/1,500部  
⑥平成22年3月/A5版40ページ/1,500部

### ③平成20年度 事業年報

事業案内およびデータベースとして制作している年報ですが、本年度は、ニュース・トピックス掲載に重点を置き、「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」受賞記念講演会の講演録・プログラムを加えて編集しました。また、従来別刷りであった「データ編」をCD-ROM化してスリム化を図りました。



発行日:平成21年8月14日  
サイズなど:A4版、160ページ  
データ編CD-ROM付属  
発行部数:1,000部  
配布先:契約先、関係行政機関、  
関係研究機関、関係団体など

### ②「食品と環境」衛生講座・1 結婚式場におけるノロウイルス食中毒対策



新刊

発行日:平成22年1月  
サイズなど:A5版27ページ  
発行部数:1,000部  
監修:伊藤 武 獣医学博士。  
当財団理事、元東京都立衛生  
研究所微生物部長。

近年、細菌性の食中毒は著しく減少してきましたが、新たに出現してきたノロウイルスによる食中毒・感染が猛威をふるい、発生件数・患者数とも最多となっています。

ノロウイルス食中毒は、飲食店やホテル・結婚式場などのさまざまな料理で発生しており、学校、高齢者施設などでもヒトからヒトへのノロウイルス感染が多発。年間100万人以上の患者が推察されます。

イラストを多用したわかりやすい説明と、日常の点検や発症時にすぐ使えるチェック表、過去の発生事例集など、実践的な内容が好評です。

### ④働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり・1~3

人生80年時代をキーワードに、平成20年度のセミナーをもとに制作した小冊子(全3冊)。首都圏はもとより関西や北陸・東北・四国等から、個人の方や健康管理ご担当者のご注文があり、本年度増刷となりました。



発行日:平成21年3月  
サイズなど:A5判  
①②64ページ、③32ページ  
発行部数:各2,000部  
(平成21年3月第一版各1,000部、  
平成22年3月第二刷各1,000部)

### ⑤脱メタボリックシンドローム 大作戦

平成19年度に出版され、3刷目の増刷を経た本シリーズも、今なお多くの皆様の健康づくりにお役立てていただいています。ホームページにおける販売でも人気は根強く、セミナー会場ではのべ200部近くを販売いたしました。



発行日:平成19年10月  
サイズなど:A5判 ①③24ページ、②28ページ  
発行総数:①②各5,000部、③7,000部  
(平成19年10月第一版①②③各3,000部、  
平成20年1月第二刷①②各2,000部、③3,000部、  
平成20年11月第三刷③1,000部)

# 映像による普及啓発

## 衛生管理者向け啓発用DVD

### 「今こそ問われる! スーパーマーケットのリスク管理 食品加工の安全・衛生管理～カットフルーツ編～」

消費者の食の安全・安心に対する関心が高まる今日、食品衛生事故のリスク、スーパーマーケットのバックヤードで発生しうる衛生面のリスクと対処法を映像で紹介。フードチェーン(農林水産物の生産から食品の販売までの一連の食品の供給行程)全体をカバーしたリスク管理を行うよう啓発しています。希望者は、当財団ホームページからお申込みいただけます。



制作日:平成21年6月 長さ:12分40秒 解説・監修:伊藤武 獣医学博士 制作枚数:1,000枚

## 事業紹介DVD

「すべての人びとのいのちと環境のために」を基本理念に、社会に貢献する当法人の事業内容と、さまざまな公益事業活動をご紹介するDVDを制作しました。創業者の紹介と設立の経緯、事業活動の歴史を、写真資料を交えて構成しています。

映像は当法人ホームページからもご覧いただけます。



制作日:平成21年5月  
長さ:7分40秒  
主な上映場所:  
公益事業セミナー会場など

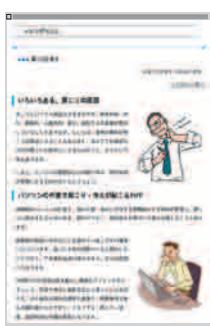
# インターネットによる情報提供

## 食と環境の科学センターからの情報発信とメールマガジンの運営・管理

東京顕微鏡院のホームページでは、食品と環境衛生のタイムリーな話題を解説する「トピックス」を掲載し、衛生思想の普及啓発に努めています。また、元気プラザのホームページでは、生活に役立つ健康情報、食品の安全と環境衛生の情報提供を目的として、毎月一回メールマガジン「元気プラザだより」を発行しています。



(東京顕微鏡院HPより)



(こことからだの元気プラザHPより)

メールマガジン「元気プラザだより」では、本年度、ドクター執筆の健康コラム、管理栄養士による実践指導「自分でできる食事と健康管理～栄養指導の現場から～」の連載をスタート。新企画「食と環境衛生のトピックス」ではノロウイルス対策、冬の室内換気、トランス脂肪酸など、食と環境の話題も幅広く取り上げました。

購読者数は、平成21年3月号の1,389名から、平成22年3月号の1,556名へと堅調に伸びています。読者の講読状況を分析し、平成22年

度は「健康生活応援メルマガ」と題して連載コラムを新設。より多くの方々に、健康な毎日を送る知識を提供いたします。



## 広報活動における予防医療の啓発

### ○日刊工業新聞

健康診断の受診結果を、積極的に日常の健康管理に役立てていただくため、日刊工業新聞健康コラム連載に協力しました。元気プラザで健診結果の判定等を行う医師7名の執筆で、「知っておきたい健診キーワード」を800字で解説。この記事は、平成22年度よりメールマガジン「元気プラザだより」に連載し、当法人ホームページを通して広く情報提供する予定です。

連載期間:平成21年4月～12月 毎週金曜(全38回)  
発行部数:500,000部 主な購読層:製造業関係者



(日刊工業新聞 2009年4月3日)

### ○月刊デンタルハイジーン

(歯科衛生士対象の専門誌)

年齢と共に変化する体調を自己管理するため、女性に多い病気解説記事の執筆協力をいました。元気プラザ 女性のための生涯医療センター婦人科医師3名によるリレー連載は、医療従事者向けの専門的な内容として読者の反響を呼びました。この記事は、メールマガジン「元気プラザだより」に平成21年度掲載し、当法人ホームページを通して広く情報を提供しております。

連載期間:平成21年1月～12月(全12回) 発行部数:15,900部



(デンタルハイジーン1月号)

# 地域貢献

## 次世代を担う子どもたちへ

地域貢献活動の一環として、4年連続して日本橋研究所近隣の小学校5・6年生を対象に「夏休み子ども研究者体験」セミナーを実施し、3年連続して千代田区立九段中等教育学校の課題解決学習に協力しました。また、都立農業高等学校(府中市)に出向き、夏季集中授業「食品産業での衛生管理」を指導。次世代を担う子どもたちを対象とした衛生思想の普及啓発に努めています。

### ①平成21年度「夏休みこども研究者体験」セミナー

白衣を着て、目に見えない微生物を観察しよう!

～きれいな手、きれいな水ってホント?～

◎後援:中央区教育委員会

◎参加校:中央区立有馬小学校、中央区立日本橋小学校、中央区立久松小学校

■ A日程:7月30日(木)～31日(金)

■ B日程:8月 6日(木)～ 7日(金)



明治時代、多くの死者を出した伝染病から人びとのいのちを守るために、東京顕微鏡院は、顕微鏡技師の育成を担い、衛生思想の普及啓発を行ってきました。そのスピリットを受け継ぎ、本年度も地域貢献活動「子ども研究者体験セミナー」を小学5～6年生を中心に関開催し、計23名が参加しました。

本セミナーは、子ども達に、身の回りの微生物の観察や、サイエンスにおける条件設定の大切さ、顕微鏡の操作方法などを楽しく学んでもらう目的で、平成18年に開始し、毎年実施しています。



本年度は新型インフルエンザの流行に伴い、「感染」に意識が高まつたことから、細菌を観察する時間を長めに設定し、学校では体験できない専門的な研究の時間を設けました。研究体験を行った日本橋研究所は、隅田川のほとりにあり、自ら採取した隅田川の水、手に

つけた菌、空気中の菌などを寒天培地で培養し、翌日変化した培地から生きている菌の存在を確認しました。全員が菌の採取から培養、グラム染色、顕微鏡検査まで体験するため、二日間の日程で行いました。

インフルエンザ対策として、「手洗いチェック」を使って手洗いを練習。何度も洗い直したのに、予想外にキレイにならなかつたことで、予防意識の大切さが学べたようです。



また、生活に「役立つ菌」についても、キムチ、味噌、ヨーグルト、納豆、ぬか漬けを使って培養実験を行いました。

参加した子どもたちからは、「身の回りにはたくさん菌がいるけど、悪い菌ばかりではない」「菌には気持ち悪いものもあったけど、きれいなものもあった、また顕微鏡で菌を見たい」「手をちゃんと洗ったつもりでも、菌がついていて驚いた」など、多くの発見と感動にあふれる声が聞かれました。



### ②地元中学の校外学習に協力



11月20日、九段中学1年生4名が、主体的に学び行動できる力を育む校外学習の一環で当財団立川研究所を訪れました。瀬戸博部長(環境衛生検査部)から水質検査の必要性や安全な水道水の価値について学び、同研究所の水質検査を見学しました。

生徒たちは、学習テーマ「ペットボトル水はなぜ売れるのか」に取り組み、約2ヵ月後の1月29日、日本橋研究所で成果を発表。仮説を立て、アンケート結果を元に討議し、ペットボトル水の売れる理由に問題意識を持ったようです。

### ③都立農業高等学校へ出前授業

同校食物科では、調理師養成施設として専門科目「食品衛生」の履修が必須です。当財団調査研究室平井誠室長、和田真太郎さん、森哲也さんが市民講師として招かれ、7月23日、3年生34名に夏季集中授業を行いました。



前日から細菌を採取・培養し、当日は、自主衛生管理システム(HACCP)の考え方を学んだ後、化学室に移動して培養した菌の観察や希釈方法などを実習しました。卒業後、その多くが食に関連した仕事に就くという生徒達からは、「衛生管理は調理師として食物を作るうえで大切」「消費者との信頼関係を深めたい」と、将来に対する抱負が寄せられました。

# 組織の活性化

## 両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの拠り所に

公益事業は当財団の基幹事業であり、また共通の歴史的ルーツをもつ当医療法人の精神基盤としても重要です。

創業の精神に則り、人びとの健康と公衆衛生の向上に先駆的な役割を果たす、というミッションの実現に向けて歩み続けています。

### ■公益委員

当法人の公益事業は、両法人合同の月次公益会議で討議され、より良い公益事業実現のために透明性をもって運営されています。平成21年度は、公益セミナー運営のほか、新たにワーキンググループを組織し、公益事業室スタッフと協働で取り組みました。こうした部門横断的なコミュニケーションを通して企業風土を醸成し、組織の活性化に生かしていきます。

平成21年度公益委員は、以下の皆さんが任命されました。

◎東京顕微鏡院：岡俊郎、角野政弥、川崎千珠子、鈴木千種、森哲也  
◎こころとからだの元氣プラザ：菅頭淳、黒川真理子、古明地彰、立田志づか、沼畑瑞穂、真崎正（五十音順・敬称略）

### Our Credo(我が信条)

本年度の活動を振り返り、公益委員の共通認識を「Our Credo 私たちの公益事業・運営方針・公益委員」として制作し、平成22年度に引き継ぐこととしました。



### ワーキンググループ活動

#### ○公益ニュースレター「Leap」編集

編集委員として、「健診の裏側」「時代が見える検査業務」を連載企画で紹介し、創業精神の顕在化と一体感の醸成、顧客満足の向上に努めました。



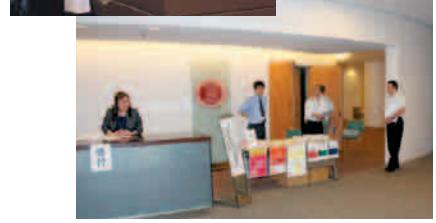
#### ○女性の健康「30代の母性」

30代の妊娠出産に関わるリスクと予防医療の啓発のため、永田順子医師を中心に、セミナーの企画運営を行いました。（詳しくは、本誌8ページ）

#### ○次世代を担う子どもたちへの衛生教育

東京顕微鏡院 地域貢献プログラムの企画運営に携わったほか、元氣プラザでは、予防医療の意義を学ぶ体験学習を職員の子弟参加で試験的に立ち上げました。

●日本橋研究所、立川研究所（詳しくは、本誌12ページ）



遠山椿吉賞授賞式

健康セミナー会場

### ●元氣プラザ

#### 平成21年度夏休み「元氣プラザ 親子セミナー」

#### 病気にならないための検査を体験してみよう！

◎参加者：当法人で働く関係者・親子

◎講 師：公益委員

◎教材開発・運営：公益委員、公益事業室スタッフ

◎日 程：8月22日(土) 元氣プラザ 1階&4階



細胞病理検査

病気にならないための健康意識をはぐくむことを目的に、今年度は職員の親子を対象として試験的に実施。健診施設での医師、看護師、検査技師等の仕事がわかる、手作りの教材を開発し、ゲーム感覚を盛り込んだ楽しく学べるプログラムを目指しました。

参加者は小学1年から6年生と保護者9組、21名。健康診断の大切さと検査内容の説明を受けた後、人間ドック施設でのエックス線検査、超音波検査、細胞病理検査の技師体験に親子で参加しました。

子どもたちは、学年を問わず体験学習に没頭し、「(口の中から



健診の大切さを説明



エックス線検査



超音波検査



顕微鏡で観察



採取した)自分の細胞を観察して面白かった」、保護者からは、「病気を予防するために行く場所を認識したことは子どもにとって大きな収穫」などの声が聞かれました。

# 組織の活性化

## 両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの拠り所に

公益事業は当財団の基幹事業であり、また共通の歴史的ルーツをもつ当医療法人の精神基盤としても重要です。

創業の精神に則り、人びとの健康と公衆衛生の向上に先駆的な役割を果たす、というミッションの実現に向けて歩み続けています。

### ■セミナー・次世代向け企画についてアンケートの実施

2009年10月～11月、両法人で働くすべての人びとを対象に、平成22年度実施する普及啓発活動に関するアンケートを行い、188名から回答を受け取りました。

集計の結果、職員が「自分も聴いてみたい」、「社会に啓発した方がよいと気づいた」セミナーテーマは、「栄養・食生活」「休養・こころの健康づくり」である事が分かりました。

次世代向け企画については、4年前から毎年開催している「夏休み子ども研究者体験」への関心が高く、開催を支援する声のほか、理化学分野や環境分野での子ども研究者体験の新設や、募集地域の拡大、開催拠点の拡大、高校生や大学生対象の体験セミナー新設、食育など多彩なアイデアが寄せられました。

公益会議では、この結果をもとに公益事業委員と意見を交換し、平成22年度の企画に反映させていきます。今後とも公益事業企画について多くの職員の声を集め、公益事業を通して社会へ貢献すると共に、公益事業が組織内の活性化などの一翼を担う事を目指します。

### ■社内オープンセミナー 「これからの健康づくりとは?」

両法人で働くすべての人びとを対象として、医事衛生の将来展望に関するテーマでセミナーを開催しました。

#### ◆4月23日 「日本の予防医療の将来 (医療経済学の観点から)」

(東京しごとセンター 参加者数:101名)



わが国は世界に先駆けて超高齢社会を迎えており、これに対応した医療、保健、福祉などの制度改革が求められています。医療経済学・福祉経済学の第一人者である京都大学理事・副学長の西村周三先生を講師に、日本社会にあつた予防医療の将来のあり方を考えるセミナーを開催しました。参加者からは「予防医療を実現するには、まずその人のこころが変わることが大切」「自分の仕事の社会的な意味を真剣に考えたい」など、多数の感想が寄せられました



### ■公益事業レポート2008

公益事業の年次ディスクロージャー誌として発刊しました。ステークホルダーの皆様に對して、様々な場において、当財団・医療法人の公益事業に関する情報開示に役立てられています。



発行日: 平成21年5月20日

サイズなど:A4判 16ページ

発行部数:3,000部

### ■公益ニュースレター「Leap」

四半期毎の公益事業ディスクロージャー誌として、職員ほか両法人に関わる全ての人びとを対象に、トップインタビュー、公益事業のトピックスなどをレポートしています。新しく、連載「医学博士遠山椿吉の業績」、寄稿コラム「Tinkiti Spirit」、シリーズ「健診の裏側」「時代が見える検査業務」を立上げ、働く仲間の姿を通して業務の真髄に迫りました。秋の増刊号では、「次世代の育成と予防医療」を特集しています。



発行:2009年夏、秋、

2010年冬

サイズなど:A4版 8ページ

(増刊号12ページ)

発行部数:各1,500部

# 一人ひとりが喜びをもって、いのちと環境のために尽くす きらりと光る存在感を持った組織へ。



東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザは、  
「すべての人びとのいのちと環境のために」を基本理念として、  
創業以来およそ120年、一切の公的な資金援助を受けずに様々な事業活動を展開し、  
自主財源で公益事業活動を展開しています。  
その創業者である遠山椿吉に初めて光をあてた作家の山崎光夫さんと、  
東京顕微鏡院公益事業担当理事で こころとからだの元氣プラザ副理事長 山田洋輔が語り合います。

【山田】 私どもは、財団法人東京顕微鏡院の創業者である遠山椿吉博士の生誕150年没後80年にあたる一昨年、「遠山椿吉賞」を創設いたしました。まだまだ歴史の浅い賞ですが、だんだん認知度が高まりつつあるなど実感しています。そもそも、先生の著書『健康の天才たち』がきっかけで、私自身、遠山椿吉という人に対する認識が強まり、それが遠山椿吉賞創設の実現に繋がっていましたという思いがあります。そこで、まず先生にはどういうきっかけで、遠山椿吉という人物に着目されたのか、その辺からお話を伺えたらと思っております。

尚、来年4月に私どもは創業120周年を迎えます。この節目の年をどのように位置づけて、どのようなことをやっていったら良いのかということを考えているところです。

\* \* \*

## 遠山椿吉との出会い

【山崎先生】 僕が遠山椿吉さんと出会ったのは、医学ものを調べているなかです。北里柴三郎でも、野口英世を調べていても、顕微鏡の研究なら当然顕微鏡院だということで遠山さんのお名前が出てくる。そういうところで頻繁に出てくる遠山さんという人は一体どういう人なんだろうと思いました。これはすべてそうなん

ですが、例えば、北里も野口のことも案外書いた人はいるんですね。いるけども、僕が書く場合には従来書かれていた新しいことを書きたいと思っています。これは僕のすべての作品に共通していることですけども、人物を発見するんですね。人の出会いと同じで、文字上で発見して、面白いなと感じると、調べる。これは発掘なんですね。考古学で、例えば志賀島で金印が発見されたと。じゃ、もう少し調べてみようというので予算を付けて行う作業が発掘。発掘する過程で、自分で書いて面白くする。この発想でもの書きをしているんです。

【山田】 なるほど。例えば、発見してから、発掘して作品になるまでにどれくらい時間がかかるのですか。

【山崎先生】 僕のは、ふつう5年、6年単位で、20年ぐらいかかっているものもあります。

【山田】 作品として熟成させるためには、やはり相当な時間を要するということですね。

【山崎先生】 最初からずっとそうなんですね。今、思ったことをすぐ何かするということは、まず僕の場合はないですね。遠山椿吉の場合は、以前いただいた「東京顕微鏡院略史」。当初、資料はこれしかなかった。そこから参考文献を集めますが、これは時間がかかるんですね。そうやって発掘作業をしているうちに、この

人は書いて面白いなと思うわけです。発掘しても深みが無いと思ったら、僕は撤退します。撤退しなかった人たちを書いているから、思い入れがある。

【山田】その思い入れがあるから、読み手に響いてくるものが作品の中に表れるんでしょうね。



遠山椿吉という名前が2カ所出てきますね。

【山崎先生】北里という人はドンネル(雷)を落とす人ですけども、気持ちの小さな人ではなかった。北里さんの恩師コッホ来日の折、遠山さん共々一緒に写真に写っていますし、お二人の仲は決して悪いものではなかったと思いますよ。

## 顕微鏡で時代をリード

【山田】先生の本には、顕微鏡が人間を変えていくという表現がありますね。顕微鏡の存在が人間の見方、人生を変えていったという。

【山崎先生】ええ。野口英世があるのは顕微鏡技術を教えた遠山さんのおかげですね。そういうことが歴史を掘りおこしていると分かる。すると、野口が頼った遠山椿吉、それから血脇守之助(日本の近代歯科のパイオニア・東京歯科大学創立者の一人)というその3人の男性が1つの巴状に関係してくるわけです。そういう人間関係も面白いですが、顕微鏡は当時の最新医療機器ですから、これを駆使する遠山さんは結局、先端医療の専門家として時代をリードしていたわけです。僕が興味をもったのは、まずそれが第一ですね。

そして、衛生を生涯のテーマとされますが、これは、人類の未来永劫の大テーマですよね。今日の顕微鏡院の仕事も衛生です。衛生にまつわるあらゆること、医療や健康づくり、食品や水の安全を確保する仕事…つまりは、遠山さんが一番大事にしたキーワードに行き着くわけですね。

## 民営の活力

【山崎先生】それと、民営だということ。顕微鏡院の1つの特長ですが、民間活力で120年もっているということは、ある意味で希有なことだと思いますね。大体、国に頼るんですね。国に頼ってもいいけれども、自由な発想がなくなってしまうとあまりよくない。

【山田】北里さんの立ち上げた国立の伝染病研究所が、内務省所管から文部省所管に移管されるでしょう。北里はそれに激しく怒って、伝研の所長を辞めて北里研究所をつくる。そのとき、財源をどう作るかと。即座に血清とワクチンの製造許可を取れと指示するぐだりがありましたね。独立を自らの力でやり遂げるには、財源を生む経営基盤をしっかりとつくらねば駄目だと、彼は長年の苦労でよく分かったんだろうと思います。

【山崎先生】経営を支える側近の善し悪しも、非常に大事だと思

いますね。

【山田】そうですね。本業の医の道を走り続ける強烈なエンジンと、経営的な分野から支える人的な組み合わせが望ましいのでしょうか。

【山崎先生】両輪です。

【山田】両輪ですね。

## 衛生にいのちをかけた生涯

【山田】先生は、明治期の日本において、公衆衛生の原点を強烈な意志とエネルギーでつくりあげていった人びとを取り上げておられますね。

【山崎先生】明治時代、ペストやコレラ、結核といった伝染病の死者は、日露・日清戦争の戦死者より圧倒的に多いわけで、衛生環境の改善が国家的な大命題なわけです。ですから、衛生に目が向いたんですね。それと、今は当たり前に血液を採って健康診査をしていますが、こういう健康診査のプロセスをつくったのは遠山さんですし、その先見の明というものはやっぱり僕にとっては魅力でしたね。

この人は、山形の出身で、東大を出て地方に帰れば一生、左うちわで暮らせる。だけど、それに甘んじることなく、もう一回、上京して学問をやる。そういう向上心、学びたいというエネルギー。これにはやはり感服します。

【山田】そうですね。明治の人たちには何か強烈な思い、要するに強い志というものをすごく感じる。

【山崎先生】「志」という字を崩すと土(さむらい)の心なんですね。とにかくもう真一文字。今の人も志を抱きますが、継続しなかつたりしますね。継続は力ですから。遠山さんは生涯、衛生に命を賭けた。それは、もって生まれた資質もありますよね。

【山田】恐らくその強さがあるから、今日まで遠山さんの起こした



### 山田 洋輔 プロフィール:

慶應義塾大学経済学部1965年卒。同年三菱油化(現三菱化学)入社。三菱化学専務、三菱ケミカルホールディングス副社長、三菱化学顧問を経て、両親が理事長、名誉理事長を務めた財団法人東京顕微鏡院理事(公益事業、広報、リスク管理、人事担当)および医療法人社団こころとからだの元氣プラザ副理事長。

事業が継続しているだろうと思うんです。それがなければ120年後の今日、われわれが彼のことを思いながら仕事をするということはあり得ない。



## 現代に生きる遠山椿吉たち

【山崎先生】僕は今の顕微鏡院を見ていて、温故知新というか、遠山さんが描いた大事なところは核として残していますね。しかし、古い仕事、例えば、顕微鏡検査だけにしがみついていたら今日はなかったと思うんです。今は、例えば超高齢社会を健康に暮らすにはどうしたらいいかとか、その教えを広めるとか、その時代、時代のテーマがあるでしょう。最新のものを入れつつ、その核は失わないようにする。古いものを大事にして取っておこうというアーカイブス精神がやはり遠山椿吉賞をつくったんだだと思いますし、120周年という節目には大事な発想だと思いますね。

【山田】それを私も感じますね。『健康の天才たち』の出版は2007年秋でしたが、私がこの財団の仕事に関わったのが同年の春からなんです。この本を読んで、これはという思いを強く持った。

【山崎先生】賞を設置すると出費もあるでしょうが、大事ですよね、名を残すことは。



### 山崎光夫氏 プロフィール：

1947年福井市生まれ。小説家。早稲田大学卒業。医療分野に造詣が深く、常に新しい角度から現代社会を捉えなおした作品には定評がある。著書に「水道水・1億人に安全給水した男—遠山椿吉」を含む『健康の天才たち』、『藪の中の家—芥川自死の謎を解く』(新田次郎文学賞)、『北里柴三郎—雷(ドンネル)と呼ばれた男』『老いてますます楽し—貝原益軒の極意』など。

【山田】そうですね。おかげさまで、ようやく「健康予防医療賞」が第1回、「食と環境の科学賞」も今度、第2回目を募集していますので、まだ歴史は浅いですが、だんだん認知度が高まりつつあると実感しています。

【山崎先生】そうですね。これが5回、10回を迎えると、それなりに評価されますよね。

【山田】それと授賞式にいつも思うことですが、受賞される方々の仕事は、非常に地味なものなんですね。地道に実験を重ね、膨大なデータを集めて論文に仕上げる。しかも非常に多くの方々と共に、一歩、一歩公衆衛生のレベルを上げていく。そういうことが本当にされているんだなと強く実感しました。そこに光を当てることの意味はやはりあるんだと感じるわけです。

【山崎先生】要するに遠山さんの名前も顕彰し、現代の研究者も顕彰する。この本がきっかけになったというのは、僕は本当によかったと思っていますね。

## 今日の顕微鏡院の姿

【山田】ビジネスという観点では、120年でこの規模かという見方もあると思うんです。

現在、両法人合せて売上高で約80億円。従業員数で441名。決して大規模ではありませんが、120年間絶余曲折を経ながら、創業者の意志を継承し、事業を継続してきた。おかげ、公的資金援助なく100%自分の足で歩き続けてきたわけです。

【山崎先生】そうですね。時流に流されない堅実さ。必ずしも大きいことがいいことではないですからね。

【山田】その通りです。われわれは何を狙い、われわれの志をどこに置くのかということは、常に考えていなければいけない重要なことだと思います。

【山崎先生】ええ。120年の歴史を簡単にたどると、例えば関東大震災のときに大打撃を受けましたね。それから太平洋戦争。こういう危機を生き残っているですから。その強さというのは何なんだと。消えた企業とか組織は、ごまんとあるわけですよ。



だから、顕微鏡院が持つ優れた特質をもう一回見つめて、肉付けをしてみてはどうでしょう。骨格はあるわけですから。

【山田】3年前この仕事に就いた最初の瞬間から感じていることは、従業員の皆さん方が、非常にまじめだということです。地道に努力を続ける人たちがたくさんいる集団。これは極めて貴重な財産だと思いましたね。遠山さんの志がいまだに流れ続けているのではないかということを強く感じます。

【山崎先生】外から見ていても浮ついたところはないですよね。堅実ですね。

## 創業の志

【山田】財団法人には、寄付行為を定めてあって、一般事業と、公益事業があるわけです。財団法人というのは税制上の優遇措置が与えられる代わりに、世の中に貢献する公益事業を推進することが求められています。食品検査や健康診断など一般事業で

経済的な基盤をつくる、公益事業にお金を出していくというスキームになっています。

それでは、私どもにとって公益事業とは何かということを議論する事があります。遠山椿吉は自分の財産を増やすという発想で事業を始めたわけではない。彼は公の利益、まさに公益に根ざし



た志に基づいて事業を始めたに違いないと私は思います。

つまり、寄付行為に記された公益事業だけが社会貢献ではなく、仕事自体が社会貢献と強く結び付いていかなければならぬという思いがあります。例えば、健康とか医療を、単にお金を儲ける手段として捉える考え方もあり得ますが、われわれはそうではない。

人びとの健康を未然に守る健康診断や、食品や空気・水の検査事業は、予防医療の向上、環境の改善を通して、広く公に貢献することが創業の原点。しかし、事業継続の手段として、事業利益は必須、不可欠であると考える。このわれわれの本来の志をしっかり示すことが大事だと思います。

【山崎先生】公益事業では、どういうことをされているんですか？

【山田】遠山椿吉賞をつくって、そこにお金を使うこともその一つです。これが研究を一生懸命やる方たちに対して非常な励みになり、公衆衛生の向上につながっていくのではないかという発想でやっているわけです。お金を使って、無料のセミナーで衛生思想を啓発していく。研究助成を行う。こうしたことは利益を生むための行為では全くないわけです。

【山崎先生】でも、それができる、あるいはそれをやるというその力が、顕微鏡院の事業が続くエネルギーの源泉かもしれませんね。そういう人のためにお金を持ち出す、そのためには稼いでいるんだというつもりでいる。これが、やっぱり1つのエネルギーになっているんじゃないですか。それも一般の企業と違うところですね。

## 創業の志の再認識

【山田】そこで、120周年は、われわれの志の再確認をすべきではないかと思っているわけです。ここにしかない、そしてなくてはならない、キラリと光る存在感を持った組織でありたい。



われわれには、「すべての人々のいのちと環境のために」という理念があります。いのちと環境のため、自分たちのできる範囲で尽くす。キラリと光る、ここにしかないもの、なくてはならないものを

われわれは追求し続けていきたいと願っています。

【山崎先生】野球でも相撲でもそうですが、自分の得意技というか、何か型を持っている人はやっぱり強いですし、伸びますよね。会社も組織も同じだと思います。それと、どうなんでしょう、海外との関わりは？

【山田】当財團の重要な仕事の一つが海外からの輸入食品検査です。日本は国民が必要とする食料の約6割（カロリーベース）を輸入に頼っている。われわれは輸入食品検査事業を通して、国民の食の安全を守ることに貢献しています。

【山崎先生】そうですか。いずれ海外から、その進んだノウハウを教えてほしいと請われる可能性も十分あり得ると思いますね。

## 次の世紀へ

【山崎先生】財團法人東京顕微鏡院。僕はこのネーミングを100年後まで残してもらいたいという気持ちがありますね。だからこそ、120年残っているという気もするんです。顕微鏡は、医療、衛生の原点ですからね。

【山田】当時は、顕微鏡が非常に大きな存在だったと思います。国民を恐怖に陥れたコレラ菌を、顕微鏡で覗いた遠山さんが「美しい像」と感じたというくだりが先生の本にある。印象的でした。

【山崎先生】はい。やっぱり僕はこういう顕微鏡下の映像に魅せられたんだと思います。魅せられるところがない



と長続きしないんじゃないでしょうか。野口も北里もそうだと思います。要するに、酔うというか、もう楽しくてしょうがないんだと思うんですよ。

【山田】なるほど。

【山崎先生】楽しむ人にはかなわないです。面白いんだと思いますね。人に言われてやっているんじゃないんですから。

顕微鏡院の組織も、人に命令されて何かするんじゃなくて、自発的にこうしましょうとか、こういうことをやりたいという、そういう空気が大切じゃないでしょうか。遊び心から新発見は生まれてくる。そこで楽しむという企業風土。組織の中が硬直せずに、何でも言える和気あいあいとした空気があるといいですね。疑心暗鬼になっていると、じり貧になりますから。

【山田】そうなんですよ。まさしくそのことは、われわれの組織運営の基本方針にもうたっているのですが、それを実現しなければならない。改めて一人ひとり、全員が、自分自身の志を見つめ直すことが大事だと思います。

【山崎先生】組織というのは、人体と同じだと思うんです。頭にいる人もあるれば、手も大事ですね。足がなければ歩けないわけですし。全部平等に揃って、はじめてひとつの体になる。ですから誰が偉い、誰が駄目とか、そういうことはないんですね。

【山田】そのとおりです。

【山崎先生】有機体なんです。ですから、活性化されている組織というものは強いと思いますね。

【山田】ぜひそこをめざして行きたいと思います。本日はありがとうございました。

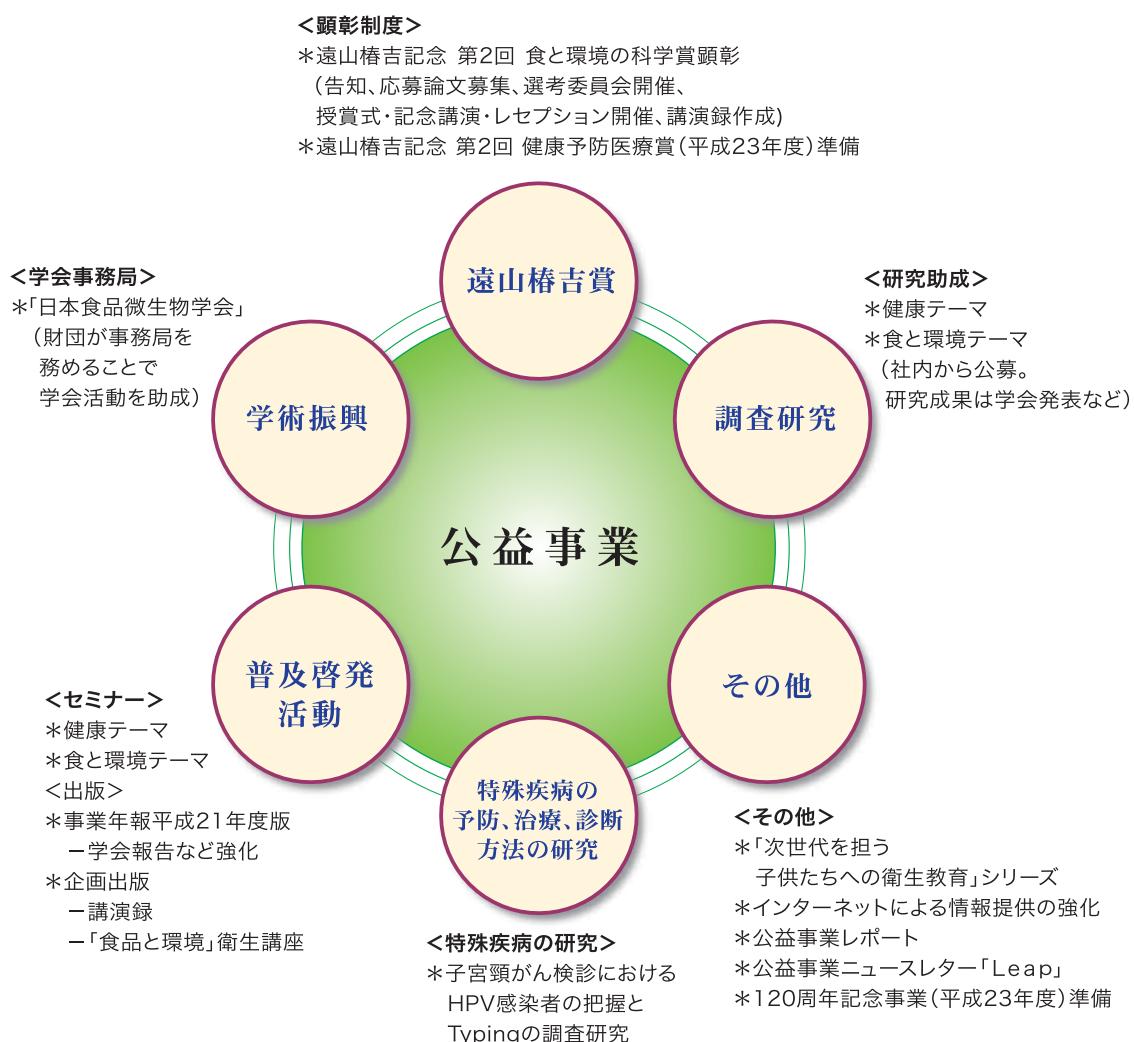
# ◇東京顕微鏡院、および こころとからだの元気プラザの歴史と公益事業～3つの世紀にわたる歩み

東京顕微鏡院、こころとからだの元気プラザの主な動き	【戦 前】	普及啓発活動、出版、その他公益事業 など
遠山椿吉、佐藤保、川上元治郎が協同して、京橋区にあった成医会の一室を借り、「東京顕微鏡検査所」を創立。検査業務開始	1800年～ 1891(明治24年)	
病原的微生物標本の頒布を開始し、本所考案の喀痰沈殿器を製造販売	1892(明治25年)	
細菌検査の実務指導を行う講習科を開講	1894(明治27年)	機関誌「顕微鏡」第1号発行 啓蒙用幻燈映画製作
名称を東京顕微鏡院と改称		「顕微鏡の祖」マルビギー200年記念式典、本院にて挙行
種痘術講習科を新設、培養基の発売開始		コレラ講習会を開催
母乳検査を開始	1895(明治28年)	回帰熱講習会を開催
事業拡大にともない、神田区小川町に移転	1896(明治29年)	「顕微鏡」第1号(1894～1944年) ※後に「東京顕微鏡学会雑誌」に改称し、 1944(昭和19)年戦時統制令で休刊するまで50年間発行。
	1899(明治32年)	ベスト講習会を開催
遠山椿吉院長、初代東京市衛生試験所長に任せられる	1900年～	
ベスト試験室を新設	1903(明治36年)	来日したコッホ博士を囲む 生花の会(於帝國ホテル) 前列左から ロベルト・コッホ博士、 北里柴三郎博士 後列左から2人目が遠山椿吉
遠山椿吉院長、医学博士の学位を授与される		
保健部を新設。広く世間の人ひとに対し、健康診査(健康診断)と衛生上の協議(衛生相談)を開始	1907(明治40年)	
遠山椿吉院長、東京市より独ペルリン市開催万国衛生および民勢学会参列、 欧州各都市衛生設備実況調査を命ぜられる。		
同時に、内務省より欧米都市における汚物掃除の実況調査を嘱託(翌年帰国)	1908(明治41年)	遠山椿吉院長、来日したロベルト・コッホ博士を招待し、生花の会を開催
遠山椿吉院長、内閣より医術開業試験委員を命ぜられる。	1914(大正3年)	「結核予防善悪鑑」発行、「結核征伐の歌」を発表
(院長、長年来の研究による)脚氣治療薬うりひんを製品化	1915(大正4年)	
9月1日関東大震災により、院舎およびその設備をすべて焼失	1921(大正10年)	創立30年を記念して、『遠山博士脚氣病原因之研究』出版
9月6日麻布区富士見町に仮院舎を建設し、10月1日一般業務を再開	1923(大正12年)	「遠山博士脚氣病原因之研究」
内務大臣より財団法人の設立許可を受ける	1927(昭和2年)	
遠山椿吉、肺がんのため遠逝享年71歳	1928(昭和3年)	脚氣の無料診療を開始
レントゲン深部治療開始	1929(昭和4年)	第1回脚氣無料巡回診療実施(財団法人東京顕微鏡院社会部)
	1930(昭和5年)	結核予防週間および健康週間に参加し、無料喀痰検査などを実施
戦災により、以後10年にわたり事業中断	1935(昭和10年)	
遠山正路院長より事業を継承	1945(昭和20年)	
診療所を開設、細菌検査所を再開		
職域を対象とした健康診断業務を開始。外来診療開始。	1954(昭和29年)	
臨床検査は病院からの受託のほか、学校保健法による集団検査を拡大	1955(昭和30年)	
東京都の委託を受け、小中学生の大気汚染の影響調査を実施(5年継続)	1967(昭和42年)	
建替えによる新院舎完成。人間ドック事業を開始。付属臨床検査所を登録	1972(昭和47年)	
食品衛生法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受け、食品衛生検査所を開設	1974(昭和49年)	
がん検診(胃、子宮、乳房)開始。多摩分室を立川に開設	1975(昭和50年)	「小笠原健康な村づくり事業」(1978年～)
水道法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受ける(簡易専用水道検査)	1976(昭和51年)	離島村民の健康管理を目的とした「小笠原健康な村づくり事業」を開始
立川衛生検査センターを開設	1978(昭和53年)	「小児ぜん息母親教室」、食品衛生セミナーなどを開催
付属第2臨床検査所を登録	1979(昭和54年)	
簡易専用水道検査 (1979年～)	1980(昭和61年)	再興30周年記念シンポジウム「21世紀のいのちと生活」開催
食品検査施設を移転し、日本橋研究所を開設(2001、2002、2005年に順次拡大)	1981(昭和62年)	学術普及誌「健康と環境」創刊(～2000年)。
立川事務所を開設、食品等分析調査研究所を合併 (1998年、食と環境の科学センター検査第3部に改組)	1991(平成3年)	創立100周年記念シンポジウム「21世紀への生命潮流」開催
会員制人間ドックを開始	1992(平成4年)	シンポジウム「ハイブリッドフォーラム'92-21世紀への対がん戦略」開催
食と環境の科学センター日本橋研究所に検査第3部を移転し、拡大	1993(平成5年)	琉球大学、西会津町役場とともに福島県西会津町住民の健康調査を実施(～1993年)
トータルヘルスセンターBe-Well、女性のための生涯医療センターViViを開設	1996(平成8年)	事業年報の発行開始
医療部門を統合・拡充し、医療法人社団こころとからだの元気プラザを設立	1997(平成9年)	シンポジウム「新時代の高血圧管理」「職場と住宅環境を考える」などを開催
立川研究所を一ヶ所に統合拡大	1998(平成10年)	シンポジウム「新しい時代の糖尿病対策」「はたらく女性とメンタルヘルス」などを開催
こころとからだの元気プラザ(飯田橋)と市ヶ谷本院の施設再配置	2000年～	
こころとからだの元気プラザ(飯田橋)外来診療と女性のための生涯医療センターViViを統合	2001(平成13年)	創立110周年記念日本メディカルシンポジウム「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」開催
2002(平成14年)	創立110周年記念シンポジウム「食の安全と健康を考える」開催	
2003(平成15年)	女性のための生涯医療センターViVi開設1周年シンポジウム「アダムとイブの医療革命」開催	
2005(平成17年)	財団法人東京顕微鏡院創立115年、医療法人社団こころとからだの元気プラザ創立3年記念シンポジウム「いのちとは何か、生きるとは何か」を開催	
2007(平成19年)	メディカル・シンポジウム「医療の未来、日本の未来—なぜ日本では高度先端医療が遅れているのか?」を開催	
2008(平成20年)	遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して遠山椿吉賞創設	
2009(平成21年)	「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」を 西尾治氏、同奨励賞を川崎晋氏に授与 遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム 「東京の水の源流を探る～豊かな東京の水利用を支える 日本の水、世界の水～」を開催	
2010(平成22年)	「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」を鈴木隆雄氏、 同特別賞を中村雅一氏に授与 遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞 (右:西尾氏 左:川崎氏)	

歴代代表者と在任期間 創立者(院長)遠山椿吉 1891～1928年 第2代(院長)遠山正路 1929～1954年 第3代(院長)細谷省吾 1955～1957年 第4代(院長)高橋悌三 1957～1967年 第5代(理事長)山田匡蔵 1967～1989年 第6代(理事長)山田和江 1989～1995年 第7代(理事長)下村満子 1995～2007年 現理事長 山田匡通 2007年～

◆多彩な社会貢献事業の展開を予定

遠山椿吉賞の運営、セミナー、シンポジウムなど普及啓発活動のほかに、学術振興や研究助成など、創業の精神に基づいてバランスの取れた公益事業活動を行い、医事衛生の進歩と公衆衛生の発展をはかり、人びとのいのちと環境のために貢献します。



東京顕微鏡院・こころとからだの元氣プラザの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
  2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
  3. 職員が参画意識を持てる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。

発行:

財団法人東京顕微鏡院 公益事業室

〒102-8288 東京都千代田区九段南4-8-32 TEL.03-5210-6651 <http://www.kenko-kenbi.or.jp>

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 広報室

〒102-8508 東京都千代田区飯田橋3-6-5 TEL.03-5210-6897 <http://www.genkiplaza.or.jp>

問合せ先：三橋祥江

2010.5.17 発行